

観光文化

Tourism & Culture

210

November 2011

特集◎日独交流150周年

—これまでの軌跡 観光や文化交流の在り方をめぐって

◆巻頭言

相互交流で学び育む未来志向の日独関係 フォルカー・シュタンツェル……①

◆特集

・日独関係の変遷をたどって

— 経験から見える両国の関係 久米 邦貞……②

・日本とドイツの文化交流、その心

— 旅を通して感じる両国の本質 小塩 節……⑦

・プロイセンが面白い

— 明治維新を先導する日本人とプロイセン 川口マーン恵美……⑪

・日独交流に見るワイン文化と観光 大島 慎子……⑯

◇研究ノート 三陸の観光復興

— 岩手県田野畑村の取り組み (2) 大隅 一志……⑳

◆連載

I あの町この町 第46回

友愛の行方— 徳島県鳴門市大麻町板東 池内 紀……㉔

II ホスピタリティーの手触り 67

リバイバルという発想 山口 由美……㉓

◆新着図書紹介……㉔



大内宿・冬景色

江戸期、下野国（栃木県）今市から会津若松へ至る道中が会津西街道と呼ばれていた。

その山あいの里に大内宿がある。この街道は会津藩主が江戸参勤のため、最短の道として開いた。保科正之はじめ二代正経、三代松平正容と十八回に及ぶ参勤の往来をした街道である。私は二十数年前、ソバの花咲くころ、大内宿を訪ねたことがある。かやぶき寄せ棟造りの連なる町並みを目にした時、深い感動を覚えたことを思い出す。その時、雪に埋もれた光景をイメージし、いつか再訪したいと思いつけていた。その念願をかなえたのは二〇一〇年の冬、一面、銀世界に覆われ静かなたたずまいの宿場は冬の眠りの中にあった。軒下の長いつららが冬の厳しさを伝える。いてつく寒さが体をこわばらせる。カメラのシャッター音が静寂を破り、往時の姿を今に伝える映像がものにでき、ほっりと胸をなで下ろす。手つかずの宿場が国の重要伝統的建造物群保存地区に指定されたのは一九七一年のことである。

ドイツの偉大な詩人、ヨハン・ウオルフガング・フォン・ゲーテの言葉に、『分別ある者は旅先で最高の教養を得る』というものがあります。知識の移転においては、実際にその土地や人々を直接知ることに勝る方法はありません。エンゲルベルト・ケンプファーやフィリップ・フランツ・フォン・シーボルトも、そのことを認識していたに違いありません。それは彼らが、オランダの東インド会社の業務に従事し、早くも一七世紀に日本研究のため来日した最初のドイツ人であり、当時のヨーロッパの知識を日本に伝えたからです。

一八六一年には初めて日本とドイツ（当時のプロイセン）間で修好通商条約が締結され、ここに両国の外交関係が正式に樹立されました。それから百五十年後となる今年二〇一一年、数多くの周年事業が展開されています。その当時から両国は、お互いの国に対する敬意を抱くとともに、絆と友好を深めながら関係を育んできました。

両国の絆を示す一例として、ドイツ東洋文化研究協会（OAG）をはじめとする関連団体が挙げられます。こうした団体はいまや日本では六十を数え、ドイツでも同様に多数の団体があります。さらに日独の多くの都市が姉妹提携を結び、それを機に専門家同士にとどまらず、一般市民の間の交流が行われることとなりました。

現在の日独両国は、これまで以上に良好な関係を維持しており、学術分野における協力関係、交易・文化交流、あるいは技術移転など、広範囲にわたり、数多くの事業が民

相互交流で学び育む 未来志向の日独関係

駐日ドイツ連邦共和国大使 フォルカー・シュタンツェル

間主導で行われています。近代的な通信技術の恩恵を受け、両国の地理的な距離は問題にならなくなりました。そうしてドイツのサッカーや音楽に幅広い興味を持つ日本の若者を目にする一方で、ドイツの若者が日本のマンガやアニメに興じる姿が見受けられます。日本でオクトーバーフェストを祝うかたわら、ドイツでは桜の開花祭を祝っています。

二一世紀初頭を迎えた今、両国は将来にも問題となる共通の課題を抱えており、これがまた大きな共通項として両国を結び付けています。日独両国は、資源が乏しく、過密な人口を抱えた脱工業化社会であり、健全で暮らしやすい環境の維持、天然資源の持続可能な利用、クリーンかつ安全なエネルギー供給、高齢化社会の進展ならびに社会保障制度の維持という大きな課題に立ち向かっていかなければなりません。

グローバル化が進んだ現代世界において、これらの課題に対する持続的な解は互いの協力の下に見いだすのがベストです。いまや学術分野においては、協力と相互研究が成功の鍵となっています。しかし大切なことは、共同研究を行う意思だけではなく、人と人の出会いです。友好関係というものは、出会いと、そこから生まれる相互の理解と信頼によって育まれます。この点において、両国間の観光客の往来を中心とした直接的な交流の拡大が、将来、多くの実りをもたらすことでしょう。まさにそれは数世紀前にゲーテが私たちに残した言葉そのものです。

日独交流百五十周年

——これまでの軌跡 観光や文化交流の在り方をめぐって

二〇二二年は、日独交流百五十周年。プロイセンの東方アジア遠征団が一八六〇年秋に江戸に到着し、翌年に日本と修好通商条約が締結されました。両国は、経済、科学、政治、文化の分野において互いに重要なパートナー関係にあります。今号では、各分野の有識者の方々に両国間の交流の軌跡、観光などをテーマにご執筆いただき、これまでどのように二国の交流関係が育まれてきたかについて、その一端を紹介いたします。

日独関係の変遷をたどって

——経験から見える両国の関係

ベルリン日独センター総裁
元駐独大使

久米 邦貞

一九六一年から二〇〇一年まで四十年にわたる外務省勤務のなかで、ドイツには三回、合わせて九年余り勤務する機会を得た。この三回のドイツ在勤の時期を比較すると、戦後のドイツが置かれた状況と日独関係の変遷ぶりを実感できる。

一九六〇年代、八〇年代のドイツ

第一回目の勤務は、六〇年代前半の四年間である。一九六一年八月に始まったベルリンの壁

の構築により、ドイツと欧州の分断がますます確定化してきた時期であった。経済面では、当時の西ドイツは「社会的市場経済」を旗印として、「経済の奇跡」とも言われた戦後の経済復興を成し遂げつつあり、日本はそれを模範にその後を必死に追いかけて、戦後の本格的な高度成長への道を歩み出さんとしていた。

第二回目は八〇年代後半、ベルリンの壁が崩壊する直前の二年間の西ベルリンでの勤務（写真↑）であった。日独はすでに世界第一、



写真↑ 一九八七年、旧日本国大使館修復後に入居したベルリン日独センター前にてプロックドルフ事務総長と筆者（写真上）。ドイツ統一後の在独日本国大使館（写真下）

第三の経済大国に成長し「世界経済の機関車」とも呼ばれ、共に世界経済をリードする責任を求められていた。政治安全保障の分野でも、日独は冷戦下の東西陣営の対立のなかで東側に直接接する西側最前線の国として共通の位置づけにあり、両国の立場は、政治経済の両面でいわば当然のこととして相互に重なり合っていたといえる。

統一後のドイツを取り巻く状況の大きな変化

しかし、西ベルリンを離任してほぼ八年半を経た一九九八年に再びドイツに着任すると、状況は大きく変わっていた。ベルリンの壁の崩壊を契機に、統一ドイツは、戦後長きにわたり負い続けた「ドイツ分断」という負の遺産を克服したことで、大いに自信を取り戻し、経済はもとより政治分野でも、欧州統合の推進やバルカンの地域紛争の解決等で積極的役割を演ずるようになっていた。

また、ソ連の崩壊で東方からの軍事的脅威が消滅したことで、安全保障面での欧州、特にドイツの米国への依存は大きく低下し、米欧の関係は変質していた。こうした背景に加え、一九九八年秋には十六年間続いたコソル政権に代わって初めて戦後世代のシュレーダー

首相の率いる赤緑連立政権が生まれたことで、ドイツの政治は大きく世代交代を遂げる。これらを契機として、ドイツの強大化を恐れる近隣諸国への配慮からそれまでは一貫して自国の利益の主張を抑え、政治面ではフランスの影に寄り添って、「欧州のなかのドイツ」を旗印に専ら欧州との協調を最優先してきたドイツが、徐々に自国の利益を正面から主張するようになったとも言われた。そしてこの傾向は、南欧諸国の債務危機に端を発して欧州経済が危機的状況を強める昨今さらに顕在化しつつある。しかし、それは同時に、戦後のドイツが一貫して示してきた過去の戦争への反省と、その上に立っての新しい欧州の建設への積極的な貢献が、近隣諸国により次第に認められ、評価されるようになってきたことの表れでもある。

この時期になると、日独を取り巻く国際環境は大きく異なってくる。すなわち欧州では、東側からの脅威が消滅して米国への依存が低下するなかで欧州統合が着々と進みつつあるのに対して、日本を取り巻く東アジアでは、南北朝鮮問題や台湾問題といった冷戦時代の遺産や、中国の台頭などの新たな緊張要因もあって、米国の軍事的関与の重要性はますます高まっている。こうした環境の変化からこ

の時期には、国際社会のなかでの日独の立場は、かつての冷戦時代とは対称的に、当然に一致するものではなくなってきたといえる。

ドイツの船会社主催のクルーズに乗船

さて話は少し変わるが、ここ三年ほどの間、ドイツのハバク・ロイドHAPAG・LLOYD社の主催する「政治問題スタディー・クルーズ」と呼ばれる船旅の東アジア部分に、同社の顧問で元ドイツの外交官であった友人の薦めで、講師として毎年二週間程度乗船する機会を得ている。船は「ハンゼアティック号」(写真2)と呼ばれる二万トン足らずで総乗客数百八十人ほどの中型クルーズ船だが、クルーズはそれを超える二百人近くが乗っており、行き届いたサービスによって5ツ星のランキングを得ている。船内には、百名余りを収容でき、各船室のテレビにも中継可能なスライドショーの装置を備えたレクチャールームがあり、二週間前後の区間ごとにその地



写真2 ドイツ船会社ハバクロイド社クルーズ船「ハンゼアティック号」

き、各船室のテレビにも中継可能なスライドショーの装置を備えたレクチャールームがあり、二週間前後の区間ごとにその地

域の政治、経済、国際情勢などを講義する学者、ジャーナリスト、外交官等の講師三、四名と、寄港先の史跡や文化遺跡等について講義をする専門家二名ほどが乗り込んで、それぞれが二、三の異なったテーマで交替して講演を行う。政治経済のテーマについては、乗船期間中に三回ほどの講師全員を囲むパネル討論会も開かれる。

船客は九割方がドイツ人、残りはスイス人、オーストリア人などのドイツ語諸国の人々がほとんどで、大半はすでに現役を退いた高齢者夫妻だが、中には働き盛りで現役の医師、弁護士、自営業者等の夫妻も見受けられる。講演は、主として終日航行する日に集中して行われるが、時間がある時は寄港地への入港前の朝食後や出港後の夕食前にも行われ、パネル討論会は多くの場合、夕食後に食後酒やダンスで一時間ほどの腹ごなしをした後に、ラウンジ中央のダンスフロアにパネリスト用の椅子を並べ替えて深夜まで行われる。もちろん寄港した先では、多くの人がチャーターバスで、また一部の旅慣れた人々は地図やガイドブックなどを頼りに、船に積んである自転車や、バス、市電などの公共交通機関を利用して寄港地周辺を終日観光して歩くのだから、この高齢者グループの満ちあふれた

エネルギーと、何よりもその旺盛な知的好奇心や文化的関心には、脱帽せざるを得ない。

ドイツ人の日本文化への高い関心と深い理解

この船旅で私が同乗する部分は多くの場合、中国沿岸部の港から始まって、年によって異なるが、韓国、日本のいくつかの港に寄港し、最後は北海道の小樽までというコースをとる。日本と外国の間を航空機で往き来する経験はこれまでも数え切れないほどになるが、こうしたツァーグループにただ一人の日本人として加わって、日本各地に海から上陸し観光して歩くことは、他では得られない貴重な経験であり、外国人の目も交えて日本を外から眺め、見つめ直す稀有な機会であった。この船に乗って海上から眺める日本列島各地の陸地の面影には、ひととき感慨深いものがある。しかし何よりも印象深いことは、日本各地で訪れる旧跡や神社仏閣等で、このツァーグループの日本文化への高い関心と深い理解が地元で多くの称賛を呼び、また毎年訪れる広島、長崎や、一度訪れたことのある鹿児島県知覧の特攻隊博物館などの戦争関連の展示施設では、それを見つめるツァーグループの人々の、他の欧米諸国からの見学者に

は見られない真剣な眼差しと、祈りの心にあふれた敬虔な態度に、案内する日本人ガイドや訪問先の関係者から深い感銘の声が聞かれたことであった。

日独両国民に存在する親近感と共感

このように日本人とドイツ人が互いに共感を分かち合えるのは、両国民が勤勉さ、緻密さ、真面目さ、すぐれた規律と組織力といった気質や価値観を共有していることによるところが大きいのは言うまでもない。また両国民は共に高い知的文化的関心を有し、その美意識にも類似したところが多いことから、ドイツ人には日本人の持つ無駄を削ぎ落とした簡素な美的感覚や、その神秘性を理解する力が備わっていることもある。しかしそれにも増して、両国民が文化芸術や物づくりの伝統では歴史を通じて常に先端を切りながらも、近代統一国家の建設や海外植民地への進出では他の先進諸国に後れを取ったことから、近代史のなかで類似した軌跡をたどってきたこと、またその結果として国際社会のなかで長いこと常に同じような立場に置かれてきたことに由来する相互の親近感や共感が、両国民間に存在することが挙げられる。

ドイツに学ぶことが多かった 岩倉使節団

明治初期に新政府によって初めて公式に欧米十二カ国に派遣された岩倉使節団(写真3)は、二十一月月に及ぶその旅の終わりに近い明治六年(一八七三年)三月にドイツを訪問した。当初使節団は、当時近代統一国家の建設で先頭を走っていた米英仏から諸制度の導入を図ることを考えていたと思われ、そのことは、まずこれらの三国を十分時間をかけて視察するという旅程からもうかがい知れる。

当時の日本では、明治維新にやや遅れて近



写真3 明治5年当時の岩倉使節団(左から木戸孝允、山口尚芳、岩倉具視、伊藤博文、大久保利通) 写真提供: 大久保利泰氏

代国家としての統一を成し遂げたばかりのドイツについては、フランスやオーストリアとの戦いに勝利をもたらしたビスマルクやモルトケの戦略の多大な成果を除いては、あまり多くのことが知られていなかったようだ。しかし使節団は旅を進めるなかで、英仏の繁栄は近代国家建設と産業革命の長い歴史の道程を経て、海外の数多くの植民地からもたらされる豊富な資源に支えられて成り立っているもので、日本には容易にまねできないものであることを痛感する。それに対してドイツでは、海外の植民地にも乏しいこの国が、専ら国内のわずかな資源と勤勉な国民の努力のみによって急速な発展を成し遂げ、他の欧州諸国に追いつきつつある様を自らの目で見聞して、この国をより身近に感じ、この国こそ日本がモデルとすべき国であると考えようになったといわれる。

使節団にこのことをより強く確信させたのが、ベルリン(写真4)で宰相ビスマルクが一行を迎えて行った晩餐会でのスピーチだった。ビスマルクは、英仏への強い対抗心を示しつつ、後発の弱小国であったプロイセンが、当時の欧州の弱肉強食のパワーポリティックスのなかで、いかにその国力を積み上げて大国に追いつくべく努力してきたかを説き



写真4 岩倉使節団訪問当時のベルリン・ブランデンブルク門周辺(「米欧回覧実記」挿絵銅版画 久米美術館提供)

つつ、国際社会のなかで日独が置かれた立場の類似性を強調する。また国際法についても、その役割は限定的で、大国は自国に都合の良い時はそれを振りかざすが、そうでない時はそれを無視して武力をもって自国の主張を押し通すとして、日独のような新興国にとっては国力を養うことこそが自主独立のためには重要であることを説く。この演説が一行に強烈な印象を与えたことは間違いなく、使節団の主要メンバーが帰国後も明治政府のなかで中核的な地位を占めたことも加わって、使節団の認識は、その後の明治政府の政策に大きな影響を残すことになる。

こうして日本は、近代国家の建設と西洋の

科学技術の導入に当たって、多くの分野でドイツをモデルとすることとなった。留学生や専門家が数多くドイツに派遣され、彼らを通じて法律、軍事、教育、科学技術、医学、文学、哲学、音楽等広範な分野でドイツから多くの学ぶことになり、それが更に日本人のドイツへの理解と関心を高めた。

近代史のなかでの パラレルな軌跡が生む日独の親近感

明治維新以来、今日までの日独関係の歴史を振り返ってみると、確かにビスマルクが強調したように、両国は近代統一国家の建設という出発点において他の欧米諸国にやや後れを取った点で共通しており、このことがその後の近代史のなかで両国が似通った軌跡をたどる遠因となったことがうなずける。両国はその後、共にいち早く急速な発展を遂げてこの遅れを取り戻し、他の列強諸国と肩を並べるに至る。その過程での海外への影響力の拡大をめぐっては他国との摩擦も生じ、誤った戦争の道を歩むことにもなるが、戦後は国際協調を指向する平和国家として新たに再出発し、奇跡的な復興と経済発展を成し遂げて、米国に次ぐ第二、第三の経済大国として世界経済を牽引する立場に立った。

さらに政治の分野でも、冷戦終結を機に分裂を克服して自信を取り戻したドイツは、欧州統合の推進役として主導的な役割を演ずるようになり、日独両国とも、その国際協調姿勢と多大な国際貢献を通じて今や着実に国際社会の評価と信頼を獲得しつつある。当初の「後発性」に由来する両国の国際社会でのハンデイは、今や国連安保理や核不拡散条約の関連など一部の限られた点を除いてはほぼ克服されている。こうした近代史のなかでの日独のパラレルな軌跡は、両国民の間に共通した気質、国民性、価値観などと相まって両国民に親近感をもたらし、友好関係の土台となってきた。

今後のあるべき日独関係

このように国際社会の先頭に立つに至った日独両国は、二〇世紀末の冷戦秩序の崩壊やグローバル化の急速な進展に始まって、二一世紀に入っただけの世界政治の多極化や世界経済危機へと目まぐるしい変化が続くなかで、今や国際社会の新たな秩序構築とルールづくりに向けた国際的努力の先頭に立って、共に積極的な役割を果たすことを求められている。こうした期待に応えるために日独両国は、これまで過去の歴史のなかで類似の軌跡を共有

してきたことで培われた相互の親近感とそれに支えられた友好関係の基盤の上に、今後はさらに未来に向けて共同で責任を果たすとの自覚を分かち合うことで、新たな協力関係を築いていくことが重要である。取り組むべき課題としては、まず現下の国際社会が直面している世界経済秩序の再構築、国連改革、軍縮、地域紛争の解決、地球温暖化対策等、多岐にわたる国際問題がある。

また戦後いち早く飛躍的な経済発展を遂げて高福祉国家を実現した日独は、それぞれの国内においても、高齢化や医療といった福祉問題、グローバル化に対応しての経済社会の構造改革の問題、教育問題、環境エネルギー問題など数多くの分野で類似した問題を抱えている。社会的公正、労使関係、企業統治などについても伝統的に類似した価値観を共有する両国が、こうした問題についてもその経験を交換し合っただけで取り組み、新しいモデルを模索、提示していくことも期待されている。

日独修好百五十周年に当たる本年、日独で行われている各種の催しは、今後の協力の基盤となる両国民の相互理解と関心を育む上で、時宜を得た有意義なものである。

(くめ くにさだ)

日本とドイツの文化交流、その心

——旅を通して感じる両国の本質

フェリス女学院理事長
独立行政法人 国際交流基金ケルン日本文化会館元館長

小塩 節

日本とドイツとの間の交流、相互の関係は他の国々との間柄とは違って大変に「真面目」で真剣なものだった。それでいて相手の良さをよく見抜き、素晴らしい本当の意味の観光から始まっている。まずその最初の第一歩から紹介しよう。

来日したドイツ人たちの足跡

日本という国の地理や地誌などがヨーロッパにそして世界に初めて正確に伝えられたのは、ドイツ人医師ケンペル（一六五二―一七二六）のおかげだった。ずいぶん昔のことである。ケンペルさん、とよく言われているエンゲルベルト・ケンプファーは、博物学や地理上の興味に突き動かされて東洋に旅したいと考え、長崎出島のオランダ商館、正しく言うとオランダ東インド会社の医師として来日、鎖国中の日本で長崎と江戸の間の往復の旅を元禄年間に二度

も経験して、何と江戸城で將軍綱吉に長時間にわたり拝謁はいがうしている。その記録が実に愉快である。ただの儀礼ではなかった。

時は一六九一年（元禄四年）、太陰暦の二月三十日、ケンペルの太陽暦では三月十九日、江戸城内の大広間。將軍以下多くの人々が見守るなか、求められて歩いたり、踊ったり、芝居のまね事を演じ、ケンペルはさらにオランダ語ではなくドイツ語で恋の歌を朗々と歌って將軍ほかの人々を大いに喜ばせた。日記を含む大著『日本誌』が英語、フランス語そしてドイツ語で出版されたのはその死後だったが、この本には日本の社会、風俗、政治、経済、宗教から動植物に至るまで実によく観察し、正確に記述している。このケンペルが日本に旅する前に読んで多くを学んだのが、同じようにオランダの禄を食くんだドイツ人医師ヴァレーニウス。この人がケンペルの本よ

り七十年前にラテン語で書いた『日本王国誌』だが、この人は一度も日本に足を踏み入れたことはなく、宣教師やオランダ商館の記録から日本誌をまとめあげたものだ。しかし今、後日独交流史のなかでもっと研究紹介されていくべきだろう。

鎖国中の日本へやってきたもう一人のドイツ人医師は有名なシーボルトである。一八二三年（文政六年）に来朝、長崎郊外の鳴滝に医学塾兼診療所を開設し、多くの日本人近代医学徒を育てた。たくさん日本の特有の植物の種子をヨーロッパに持ち帰った。一八二八年（文政十一年）に禁制の日本国内地図を国外に持ち出そうとしたことが明るみに出ていわゆる「シーボルト事件」が発生し、国外追放処分を受けたが、後に大著『日本』（Nippon）その他を著し、日独関係に極めて大きな功績を残した。



トロイア発掘のシュリーマン、
1865年来日
Classic Vision / AGE Fotostock / JTB Photo

もう一人、案外に知られていないのが、トロイア発掘をやつてのけたハインリヒ・シュリーマンで、一八六五年に日本を観光目的で訪ねて、フランス語で優れた日本訪問記を書いている。それは日本への牧歌的でロマンチックな感動と、やがてこの国日本が強大な工業国になるだろうという予想との間で揺れている。面白いではないか。

ヨーロッパに渡つた日本人の足跡

さて、もっと大事なのは、日本側がどのように初めてドイツの実態に触れたかだ。

江戸の徳川幕府は京都の天皇から外交交渉権を与えられていた。一八六二年（文久二年）、幕府は日本史上初の中央政府派遣の総勢三十八名からなる外交使節団をヨーロッパに送った。日本からヨーロッパに使節が派遣されたのは、一六二三年に伊達政宗の命によって支倉常長が通商交渉のためにローマに向

かって以来、二百五十年ぶりだった。支倉はドイツには寄っていない。文久二年の第一回遣欧使節団は英・仏に続いてプロイセン・ドイツを訪問、まずケルンに寄り、一泊のち列車でベルリンに向かい、立派に外交の使命を果たした。

ケルンでちょんまげ姿の彼らは未完成の大聖堂の最上階まで登り、ライン地方を楽しく眺め渡し、集つた大観衆に扇子をかざして挨拶を送り、降りてくると女性たちと住所氏名の交換などもしている。ライン対岸ドイツ市（国名と発音は同じだが綴りは違う）の宿ではゼクト（シャンペン）を大いに飲んだ。赤ワインは血の色のように気に入らなかつた。ベルリンでは政府間交渉を見事に果たし終え、馬車で市内観光。ベルリン大学教授のグリム兄弟の家も訪ね、オランダ語で談笑している。グリム兄弟の弟ウィルヘルムはすでに世を去っていたが、兄のヤーコプは健在だ



グリム兄弟の像、ハーナウ市
（左が兄ヤーコプ）
Ernst Wrba / Alamy / JTB Photo

つた。この時何を話し合ったか、今のところ記録は見つかっていない。しかし派遣団の報告書によれば、彼らの市内観光はいいかげんなものではなかつた。いくつもの軍需工場、特に銃砲の生産工場、大小の病院、大学、小中学校、道路の状況などをつぶさに見て歩いている。観光は同時に学習視察だった。

翌年帰国後は尊王攘夷のテロが激越さを増していたので、旅行記録の公開はしばらくできず、江戸城の奥にしまいこまれた。けれどもこの経験は九年後、一八七一年明治四年の岩倉使節団に受け継がれ、日本近代化に大きな影響を与えた。文久二年の使節団！彼らについてはもっと知られていい。

外国奉行竹内下野守保徳（五十六歳）以下総勢三十八名の団員中には備通詞（通訳）福沢諭吉も加わっている。彼らは現代日本人の観光旅行ならまず挙げられる南ドイツのノイシュヴァンシュタイン城、古都ハイデルバ



福沢諭吉
国立国会図書館

ルク、ローレライの岩を見ながらのライン下り、ボンのペートーヴェンの生家、ベルリンやドレスデンやライプチヒでの生の音楽会などは訪ねていない。

知識ではない 純粋な感性で捉えたドイツ

文久二年の彼らには、これらのうちのどれ一つも訪ねるゆとりはなかった。知識もなかった。しかし彼らはまずケルンに着いて壮大な大聖堂に自らの足で登り、異教キリスト教のことは知らないのにこれは神の「城」だと書き残している。そして土地の人々と楽しく交歓し、日本の住所を人々に教えて来日を勧め、夜は土地の料理、ドイツ産シャンペンを大いに味わい、初めて渡った「鉄の橋」の下を悠々と流れるライン河の眺めを楽しんだ。ベルリンの市内観光で何を見たかは、先にご紹介したとおりであって、何と柔軟な感覚と進取の



ライン河畔、ケルンの大聖堂
JTB Photo

精神の持ち主だったのだろうかと感じさせられる。

彼らは案内さ

れた名所旧跡をただ眺めたのではない。何事につけ対象を自分の目と耳

と足を、つまり全身でつかまえ理解

しようと努め、特にドイツの人々が規律正し

く清潔で勤勉な姿をしつかり心に刻んで帰っ

た。その点は九年後の岩倉使節団のベルリン

経験は少し違っている。無理もない、第二回

目の使節団が訪ねたベルリンは普仏戦争に勝

利して大浮かれて浮かれていたプロイセン。

ドイツのやや軽薄な首都風景だったのだから。しかしこのプロイセンの普仏戦争勝利を

きっかけに、日本の近代化は憲法、法律、軍

事、医学、哲学を始めとしてあらゆる分野で

圧倒的にドイツに学ぶこととなった。

さて二世紀にドイツを旅するには

二二世紀のこれからの日本人は、ドイツへの観光旅行に出たら何を見たいだろうか。何を知るべきだろうか。



悠々と静かに流れるライン河 (筆者撮影)

旅行会社が用意してくれるさまざまなプロ

グラムがある。訪ねる国がドイツだから、不

真面目なものであるはずはない。安心して出

かけていい。しかし、ほんのちよつとでも時

間があつたら頼んでドイツの工場か生産会社

を訪ねてみたいものだ。そして知るべきポイ

ントはドイツ人の技術に対する自信と頑固さ

だ。ドイツ人は一般的に物を作る技術の精緻

さにこだわり、成果に自信を抱いている。製

品を売る、あるいは買いに来させるに当たっ

て物は売るけれども特許は売らない。これで

ある。欲しかったらドイツまで買いに来い、

という。反対が残念ながら日本なのだ。海外

特に新興国に工業製品その他を売る時に、特

許もどんどん売った。その時はいくらかのお

金が入る。バブルにもなる。しかし何年も

経たぬうちに特許を売りまくった相手に追い

上げられ、追い越されて青息吐息の日本。

短い観光旅行でも、心がければドイツ的頑

固さの一端に触れることができる。受け身に

見るだけでなく、進んで見つけたものだ。

ドイツ人には頑固な一面もあるが、長い休暇

で訪れるバーデンバーデンやウィースバーデ

ンなどの温泉リゾートでドイツ人と一緒に過

ごすのもいいかもしれない。彼らが実にのん

びりと過ごしている様子がお分かりになるだ

ろう。日本でも本物を求めることが何かと見直されるなかで、日本の温泉地で少し長めの滞在を試みる時の参考にしてみたいかか。きつと楽しいことになるであろう。

日本文化に対するドイツ人の視点

ところで、ドイツ人は日本に来て何を面白いと思うのだろうか。私たちはこんなに交流の深くて長い相手のドイツ人に、何より何を見せたいか。その問いを解く鍵が、次のような言葉にある。

「私は日本文化を愛します。

我、日本文化を愛す」

ブルーノ・タウト Bruno Taut

第二次世界大戦の始まる前、一九三三年（昭和八年）に來日して三年間、建築や工芸の指導をしたドイツ人建築家タウトの繰り返し語り記した言葉である。「Ich liebe die



ブルーノ・タウト
(1880~1938年)
Ullstein bild/APL/JTB Photo

Japanische Kultur:

イッヒ リーベ ディ

ー ヤパーニツシエ

クルトウアー」。こ

れはお世辞でも思

いつきでもない彼

の本音だった。

伊勢神宮や桂離

宮、白川郷などの

建築としての素晴

らしさを日本国内だけでなく、全世界に向けて発言、発信した。日本文化の深い理解者で

あり紹介の恩人だったタウトは、例えば桂離

宮について次のように考えた。近・現代ヨー

ロッパの建築は、建築家の「個性の表現」と

しての作品であるが、桂離宮にあつては、建

築家の創作個性は背景に下がり、隠れて、「よ

り高いもの」を実現している。これが日本だ、

日本の芸術、日本の建築である、という。建

築は有用技術であると同時に芸術なのだ。「俺

が、俺が」と自分の名刺を誇示するのではない。

日本心の真の良さをタウトはここに見た。

また「こんなことも言っている。「芸術は、常

にいつも変わらず人間の感情の最高の表現

であり、であるからこそ、人間の魂のなかの全

ての悪魔に対する最も鋭い刃なのである」と。



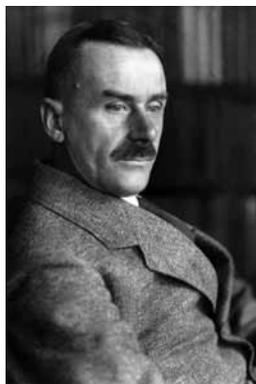
世界遺産 白川郷

また重ねて桂離宮と伊勢神宮を、建築史上の「世界的奇跡」である、とたたえたのであった。

日本固有の財産と心に自信を持つ

人類の「世界的奇跡」について語った別の人があった。第二次世界大戦でドイツが無条件降伏をした一九四五年にアメリカの首都ワシントンの国会図書館で、敗戦国ドイツからの亡命作家トーマス・マンは胸を張ってこう言った。「ドイツとドイツ人は世界にその最も深い音楽を贈った。深いドイツ音楽のなかの、特に歌曲は人類の世界的奇跡である」。

惨めに崩壊し降伏した母国を背負って、戦勝国の首都でこう言い切ることのできるドイツ魂というのは、やはり感嘆すべきものであろう。自己卑下をすることの多い私たち日本人は、日本の自然遺産、文化遺産、そして日本心の心にもっと自信を持つてしかなるべきであると思う。（おしお たかし）



トーマス・マン
(1875~1955年)
Ullstein bild/APL/JTB Photo

プロイセンが面白い

明治維新を先導する日本人とプロイセン

作家（ドイツ・シュトゥットガルト在住）

川口マーン恵美

プロイセンが面白い。その誕生からして奇

妙だ。そもそもプロイセンというのは、バルト海沿岸に住み着いていた先住民プルツェンからきている。一三世紀、そこにドイツ騎士団が入り込んで、暴力的な手段で異教徒の地をキリスト教化していく。それに伴い、多くのドイツ人やスラヴ人が入植し、生き延びたプルツェン人は入植者と混血し、言葉も宗教も文化も失い、やがて絶滅してしまった。

プロイセンの始まり

こうして新しい修道会国家が成立し、華やかな発展を遂げる。国家の長は、選挙によって選ばれた修道会総長で、治世者である騎士たちも皆、聖職者だ。そして、新国家の名はプロイセン。征服した者が、潰した小国の名を踏襲するというのも珍しい話だが、結果としてプルツェンの民は消えても、その名は

プロイセンとして残ったのである。

プロイセンは、しかし、もちろんバルト海沿岸の小国としてはとどまらない。次の発展のきっかけは、一六世紀初頭にこの国の総長が修道会国家を放棄したことだ。総長の名は、アルブレヒト・フォン・ブランデンブルク・アンスバッハ。彼は俗人となり、めでたく結婚し、ドイツ騎士団をプロイセンから追い出してしまふ。平たく言うなら国家の乗っ取りだが、これによりプロイセンは世俗の公国となる。この際、見逃してはならないのは、このアルブレヒトが偶然にも、ホーエンツォレルン家の人間であったということだ。

ホーエンツォレルン家というのは、後にプロイセン国王、ひいてはドイツ帝国のカイザーを輩出する家系だ。元々の出身は南ドイツで、一五世紀によくやくブランデンブルク辺境伯として東方に進出する。ブランデンブルク

クというと、ベルリン、ポツダムを包括する

地方だが、当時は片田舎の開墾地で、その名のとおり辺境でしかなかった。当然のことながら、ホーエンツォレルンの領主は、新しく授かったこの僻地にはさして興味を示さず、最初の三代はブランデンブルクからはなるべく遠ざかって一生を終えた。彼らの関心は、もっぱら南ドイツの領地ニュルンベルクの統治にあったのだ。当時のニュルンベルクは神聖ローマ帝国の皇帝の直轄地で、豊かで文化隆盛の地だった。ベルリンが後年ドイツ帝国の首都になるなどとは、まだ誰の夢にも出てこなかったころの話である。

悠久のホーエンツォレルン城

私の住むシュトゥットガルト近郊のヘッピンゲンというところに、ホーエンツォレルンの出身城がある。国道を走っていくと、平坦な田



写真1 丘の上にそびえるホーエンツォレルン城



写真2 ホーエンツォレルン城



写真3 眼下に広がる田園風景

園風景の真ん中へぼつこりと丘が現れ、さらに近づくと、その頂上に中世の砦とりでのような城（写真1）が見えてくる。車の上の駐車場まで上がり、そこから城まで十五分ほど登る。ハイキング好きのドイツ人のなかには、リュックを背負ってふもとから登ってくる人もいる。城は堀で囲まれており（写真2）、城門の前に小さな釣り橋がある。そこを渡ると、トンネルのような防衛壁がらせん状に続く。その薄暗い通路を、石畳に響く自分の足音を聞きながらたどっていくと、ふと、今にも後ろから、鎧よろいに身を固め、息も絶え絶えになった伝令が、馬の蹄しんの音高く駆け上ってくるような錯覚にとらわれる。

頂上からの眺めは絶景（写真3）だ。初夏には、辺りの何千本もの果樹の花が満開で、丘も里も真っ白にかすんでいる。夏は明るい太陽が森や畑に照りつけ、秋は鮮やかな紅葉が目まぶしい。そして冬、大気がいてつくころ、葉を落とした木々はすっかり樹氷に覆われ、うつつらと差す日のなかで宝石のように輝く。遠くにはシュヴァーベンシュヴァーベンの連山。特別に何かが見えるわけではない。ただ、その三百六十度の田園風景の単純さに、私はいつも感動する。二世紀のころ、権力を持った人間も持たなかった人間も、ここからこの景色を眺めたのだと思う。そして、私が死んだ後も、人々はやはりここから同じ風景を眺めるのだらう。

ホーエンツォレルン家の舞台は、しかし、やがて南ドイツからブランデンブルクに移り、次第に力を養っていく。そして二六世紀、前述のように、バルト海の彼方に同族の支配するプロイセン公国ができた時、彼らはそれを見逃すことはなかった。さまざまな努力の末、一六一八年、ブランデンブルクはプロイセンと同君連合を形成することに成功し、さらに一七〇一年には、それがプロイセン王国として統一される。バルト海の小さなブルツェンはついに王国となり、遠く離れたベルリンがその首都となった。

プロイセン王国の首都ベルリン

ベルリンといえば、王宮のことを書かなければならない。戦前の写真を見ると、壮大なベルリン王宮（写真4）がベルリンの町全体を圧倒しているのがよく分かる。一五世紀に建てられた質素な城は、プロイセンの興隆とともに徐々に巨大で絢爛けんらんな王宮となっていく。さらに一八七一年にドイツ帝国が成立してからは、王宮はカイザーの居城でもあった。一八六一年、日本はプロイセン王国と国交を結ぶ。日独国交の始まりだ。そして、一八七一年、ドイツ帝国ができたその年、岩倉使節団が欧米視察の旅に出た。



写真4 戦前のベルリン王宮

Top Photo/APL/JTB Photo

その一員であった久米邦武著の『特命全權大使 米欧回覧実記』（岩波文庫・全五冊）が珠玉。久米は佐賀藩出身の歴史学者で、ありとあらゆる見聞を執拗ともいえる情熱で書きとめていくのだが、その観察が信じられないほど細かい。なにゆえに二百五十年も鎖国をしていた国の人間が、突然目にした異郷の光景から、共和制や民主主義や、君主制、個人主義といったものの本質、長所、そして短所をここまで鋭く洞察できるのか、それが不思議でならない。近代日本を作った人々は、

恐ろしいほど優秀であったに違いない。

一八七一年に始まった視察の旅は延々と続き、彼らがプロイセンを訪れたのは一八七三年のことだ。統一を成し遂げたばかりのドイツは、おそらく希望と活気に満ちあふれていたのだろう、日本のエリートたちはその空気を正確につかみ、そして、統一の立役者であるビスマルクに惚れ込んだ。

鉄血宰相ビスマルクと日本使節

ビスマルクも日本の使節団にはすこぶる好意的だった。そして「全ての国は礼儀正しく友好的に交わるが、それは外見だけ。本当はどの政府も違うことを考えている。強い国は常に弱い国に圧力をかけ、小さな国は大きな国にさげすまれる。プロイセンは長い間、弱小で哀れな状況にいた。今の日本は、まさに数年前のプロイセンだ。我々は、権利の保持と自己保存に努めねばならない。同じ状況にいる我々両国は、特別友好的に交わるべきである」というようなことを懇切丁寧に説いた。そんな心のこもった老宰相の言葉が、一日も早く先進国に追い付こうと心に誓う日本使節団の胸にずっしりと響いたことは想像に難くない。プロイセンも、哀れな状態から抜け出すために軍国主義を敷き、規律と服従と勤

勉とでここまでできた。しかも、弱者に優しい心持ちを忘れていない。「この国の政府の方針は、イギリスやフランスよりもずっと役に立つ」と岩倉（具視）は確信する。こうして、日本はアジアのプロイセンとなるべく歩み始めたのである。

岩倉使節団の一員であった伊藤博文は、一八八三年、憲法を学ぶため、再びプロイセンを訪れる。ビスマルクは伊藤との再会を大変喜び、伊藤も岩倉と同じく、ビスマルクに心酔した。

こういうシーンを脳裏に描くたびに、私は必ずベルリン王宮を思う。王宮で、彼らはカイザーに謁見し、また、ビスマルクと晩餐をしたのだろう。一八八四年には、森鷗外が陸軍の衛生制度を調べるためにやはりプロイセンに赴いている。留学中、彼がベルリンで最初の数カ月を過ごした下宿は今もあり、記念



写真5 森鷗外記念館のプレート

館(写真5)になっている。彼も毎日のように、威風堂々のベルリン王宮を眺めたはずだ。

時は流れ、一九一八年にドイツ帝国が第一次世界大戦に敗れると、カイザーは貨物列車にごっそりと財宝を積んでオランダに亡命した。

ドイツ帝国はあつげなく消え、ワイマール共和国が建てられ、空っぽの王宮は博物館になった。

一九二六年、私の祖父がベルリン大学(写真6)に留学している。ベルリン大学とベルリン王宮とは目と鼻の先だ。祖父は博物館となった王宮をきつと訪れたに違いない。



写真6 筆者の祖父も通ったベルリン大学(現フンボルト大学)

消されたベルリン王宮

一九四五年二月三日、ベルリン王宮は燃えていた。当時、すでに空襲は毎夜のこと、王宮が燃えても誰も驚かず、消火に当たる者さえいなかった。こうして四日間燃え続けたあと、そこには、なおも頑丈に聳え立つ壁と、しっかりとした丸屋根の骨組みが残った。

一九四九年、東ドイツが建国され、プロイセンの面影を憎んでいる人物が指導者の座に就いた。ヴァルター・ウルブリヒト、後に壁の建設を命じた人物だ。ベルリン王宮は、優雅で特権的な貴族のおいがした。労働者の国にはそぐわない。そこで一九五〇年、ウルブリヒトは王宮を爆破する。五百年も建ち続けた王宮は消え、ベルリンの真ん中にはぼつかりと穴が開いた。

一九七六年にはそこに、東ドイツの時の指導者ホーネッカーが共和国パレスという多目的巨大ホールを建てた。共和国パレスは、党の行事の会場となり、前の広場では軍事パレードが行われた。しかし、それ以外の時は開放され、市民のモダンな憩いの場となった。

一九八九年、壁が無くなり、その翌年に東西ドイツは統一した。すぐさま共和国パレスが問題になった。というのも、この建物はア



写真7 解体作業中の共和国パレス

スベストで高度に汚染されていたからだ。結局、共和国パレスは解体され(写真7)、かつてベルリン王宮のあった場所は、二〇〇八年十二月、再びただの更地になった。ウルブリヒトがプロイセンの思い出を無きものにしたのと同じく、統一ドイツは、東ドイツの思い出を無きものにしたのである。

王宮がよみがえる！

そして、ここに再びベルリン王宮が戻ってくる！ ドイツ人とは信じられないことをす



写真8 フンボルト・ボックス



写真9 フンボルト・ボックス内に展示してある
ベルリン王宮完成予想図

る人たちだ。王宮の複製を造るのではなく、
中身は科学と文化の殿堂になる。名付けてフ
ンボルト・フォーラム。しかし外見は紛れも
なくベルリン王宮である（イタリア人建築家
のデザインで、建物の一面にだけ近代的な壁
面が付け加えられる）。

二〇一二年の六月には、敷地の一角にフ
ンボルト・ボックスというインフォメーション
センターができた（写真8）。過去の王宮に
ついでに資料、そして、これから建設される
フォーラムのコンセプトがよく分かる。私は、
王宮の復元（写真9）が待ち遠しくてたまら
ない。完成は二〇一八年の予定。岩倉や伊藤、
陽外が見たベルリンの風景を私も見るこ
とができるのだと思うと、ワクワク胸が躍る。

ただ、なぜ今頃プロイセンなのかという声
は、もちろん高い。プロイセンは跡形もなく
消えたはずなのだ。同じ運命であったはずの
バイエルンやヘッセン、バーデン、ヴュルテ
ンベルクは今でもある。人々はそれぞれの方
言を話し、昔ながらの伝統で祭りを祝う。と
ころが、プロイセン人はどこにもいない。か
つてドイツの歴史家セバスチャン・ハフナー
は、「プロイセンは存在する必要はなかった。
世界はプロイセンなしですますことができ
た」とまで言い切った。果たしてそうなの
だろうか？

カイザーの子孫の住む城

一九一八年にドイツ帝国が崩壊した時、永
遠にカイザーになれなくなった皇
太子ヴィルヘルムは、父親とも
にオランダへ亡命したが、まも
なく、政治活動をしないうことを条件
にドイツへ戻っている。夫人のツ
エツィーリエは、一世を風靡した
人気の妃で、その名を冠した彼女
の居城ツエツィリエンホーフは、
今もポツダムにある。
ホーエンツォレルンが中世の山
城であるのに対して、ツエツィリ

エンホーフは、洗練された庭園のなかにひっ
そりとたたずむイギリス荘園風の大邸宅と
いった趣だ。実は隅々まで贅が尽くされてい
るのに、豪華絢爛には見えない。これこそ究
極の雅であろう。ちなみに、戦後の世界の
秩序を定めたポツダム会議は、ここツエツィ
リエンホーフで開かれた。ベルリンは空襲で
破壊されており、首脳会談の開ける会場は
なかった。

さて、第二次世界大戦後、ヴィルヘルムと
ツエツィーリエは、ソ連領となったポツダム
を逃れて南ドイツに移り住んだが、ヴィル
ヘルムはなんと、ホーエンツォレルン城に戻っ
ている。そういえばこの城は、今でもホーエ
ンツォレルン家の所有だ。カイザーの子孫で
ある城主が逗留している間は、屋根の上に家
旗が掲げられる。それを見る時、ヨーロッパ
にはまだ中世の歴史が脈々と息づいているの
だと思ふ。

ホーエンツォレルン城もツエツィリエンホ
ーフも私にとっても好きな場所だ、日本から知
人が訪れれば、どちらかに必ず案内するほど
だ。そして、偶然にもどちらもプロイセンと
深く関わっている。

プロイセンは、決して死んではない。

（かわぐち マーン えみ）

日独交流に見るワイン文化と観光

筑波学院大学経営情報学部教授

大島 慎子

ドイツのワイン文化と観光を語る時、食文化、街道文化そして温泉文化という三つのキーワードを欠かすことはできない。

日本でのドイツ食文化の始まり

日本におけるドイツの食文化は、第一次世界大戦の捕虜として板東俘虜収容所や習志野の収容所にいたローマイヤ、ケテル、ユートハイムたちがソーセージやパンを紹介し、日本人の食生活に影響を与えたのが始まりである。ハンバーガーもマクドナルドが日本に上陸する何十年前も前、やはり捕虜生活後日本に残ったドイツ人が銀座に開いたジャーマンペーカリーで出されていた。この店は谷崎潤一郎の『細雪』にも書かれているが、私も子供の時に行った記憶がある。現在は、そのドイツ人たちが築いた日本におけるドイツ食文化は世代が替わり、ブランドとして名前は残っ

ても、店舗は日本の大企業に吸収されている。

食文化のTPO

一方、現代では、多くの日本人がドイツに観光旅行に行き人的な交流は盛んであるが、

「ドイツ人は、ビールを飲み、ソーセージとじやがいを食べている」というイメージは日本人の頭からは消えていない。私は長年ルフトハンザ ドイツ航空の広報担当者としてドイツ全土を報道関係者に紹介し、本社の行事や顧客を招いての食事会などに参加する。うちに、ドイツ人が日常生活でビールを飲む時と、ワインを楽しむ時(写真1)がはっきり分かれていることを知った。また、ドイツの食文化はソーセージやパンの膨大な種類、季節感にあふれた食材と郷土料理や家庭料理の数々があり、特有のシステムがあることに気づいた。ドイツ農林省の外郭団体でドイツワイン

の振興に数年関わり、ワイナリーの試飲会に参加する機会に恵まれた経験からいうと、食文化はその地域の気候風土や場の雰囲気があつて初めて理解できるものではないか、と思



写真1 ラインヘッセン地域のヴォルムスの聖母教会で行われた、リープフラオミルヒ(マドンナのブランドの白ワイン)のパーティー

うのである。例えば、ミュンヘンのオクトーバーフェストの喧騒と興奮のなかでこそ、あのリットルのジョッキが飲み干せるわけ、日本の食卓で同じものがあっても魅力は感じない。この意味で、食文化は観光でその地域に行つてこそ、理解できるものである。

季節にこだわるドイツの食文化

日本人の食生活ではハウス物と輸入品があふれ、果物も野菜も通年で手に入ることが日常化しているが、ドイツ人は頑なに季節感を守っている。春を告げるのは白いアスパラガスであるシュパーゲル Spargel である。ドイツ人のこだわりはドイツ産 Deutscher Spargel で、五月中旬から聖ヨハネの祝日である六月二十四日まで店頭に並ぶ。シュパーゲルにはシルバーナ品種のドライな白ワインを合わせるのが伝統である。ドイツのワイン生産量では七割が白ワインで三割が赤ワインであり、これは地球の温暖化の影響もあるが、醸造技術が進んだためである。ワイン生産の北限といわれたドイツで、現在白ワインの品種の七割がリースリング種であるが、昔はシルバーナ種がドイツを代表していた。ドイツ産シュパーゲルとシルバーナにはこの伝統が残っている。

ドイツが日本にもたらした食文化には前述のドイツ人捕虜が伝えたパンやソーセージがあるが、ソーセージの文化はドイツの肉屋でソーセージの種類に圧倒され、また屋台でソーセージを体験して初めて分かるのである。

ドイツ人が食すソーセージの素材は豚が基本である。後年ソーセージがドイツ移民によりアメリカに渡り、ビーフが素材の中心になった。食べ方としては、湯で加熱するソーセージと焼くソーセージに分類される。ゆでるソーセージの代表格がフランクフルターであり、ミュンヘンの白ソーセージである。この白ソーセージは、仔牛肉、豚背脂、ゆでた豚厚皮で作られ、レシピによりパセリ、レモン皮、メース、たまねぎ、更には生姜やカルダモンを加える。出来上がった混合物を豚腸に詰め、十二〜十五センチごとにねじって作るのだが、伝統的に早朝に作られ、「正午の鐘を聞いてはならない」という言い伝えどおり、午前中に食べる。これは冷蔵庫の無い時代に肉は傷む前に食べる、という知恵から生まれている。そして白ソーセージは、甘いマスタードとビールで食べる。焼きソーセージには地名がついているものが多く、ニュルンベルガー、アウクスブルガーなどその地域の屋台で焼かれ、これもビールと合う。

夏の風物はじゃがいもで、マーマレードで何十種類ものじゃがいもが並ぶ様子は壮観である。じゃがいもも屋台で焼きソーセージの付け合わせになる時はビール、レストランでメインコースの肉や魚の添え物になる時は、ワインとなる。初秋にはキノコで、各種のキノコのなかで、ファイアリング Pfifferlinge というキノコが季節を告げる。キノコはクリームと合わせてソースにしたり、炒めたりするが、これもワインと合わせる。そして冬は狩猟の季節であり、ヴィルト Wild の季節は鹿肉が中心になるが、これにはシュベートブルグンダー品種やドルンフェルダー品種の赤ワインを合わせる。同じヴィルトでも、ウサギやキジなど鳥類の場合は、白ワインを飲む人が多い。季節の食材とワインのマリアージュは、その土地で味わうものである。

街道文化に戦略的観光政策を見る

さて、街道文化だが、ドイツで街道といえはロマンチック街道が有名であり、ヴェルツブルクからフュッセンまでの道の周囲に点在する中世の街並みが日本でも知られている。ロマンチック街道は、そもそもはローマ帝国時代の「ローマへの道」の意味であり、当世風のロマンチックな雰囲気という意味合いで

はない。フランクフルトからミュンヘンまでのバスが、昔からロマンチックバスと名乗っていたが、この街道が有名になったのは、第二次世界大戦後に駐留していたアメリカ軍の家族が、休暇を過ごすことが多かったことに由来する。ドイツ人にとっては日常的な風景であってもアメリカ人にとっては中世の街並みは非日常社会であり、これは観光誘致に最適とばかり、ロマンチック街道協会を結成してプロモーションを始めたものである。敗戦から工業国として復興してきたドイツが、観光立国を目指すタイミングと相まって、この街道をアメリカ人、そしてバブル期に入った日本人を対象に大々的に宣伝した。

ドイツの観光政策は戦略的である。遠方からの観光客はドイツに宿泊するが、隣国からの観光客は車で素通りするとの理由で、日米を対象にプロモーションを開始したのは一九八〇年ころの話である。私はルフトハンザの広報に配属されたばかりのころで、ロマンチック街道の紹介のため、当時アンノン族という言葉が流行させた、女性誌の「non-no」の記者を招待して、街道の最終目的地であるノイシュヴァンシュタイン城(写真2)のロマンチックな雰囲気取材してもらった。ロマンチックという言葉重視したため、魅力



写真2 ノイシュヴァンシュタイン城

的な風景とルードヴィッヒ2世の悲劇的なストーリーばかりを考え、ロマンチック街道の起点であるヴュルツブルクは、フランケンワインの大産地であると気づいたのは後のことである。ノイシュヴァンシュタイン城は、城郭建築としては評価されていないが、音楽家ワーグナーを敬愛し庇護しながらも悲劇的な最期を迎えたルードヴィッヒ2世のエピソードは有名であり、東京ディズニーランドのシンデレラ城のモデルとしても知られている。

ドイツ人の休暇の過ごし方から生まれた休暇街道

街道文化は、ドイツでは観光街道という観光地を面でつなぐコンセプトが古くからあり、正式な名称は「Ferienstrasse」であるから直訳すると「休暇街道」であり、百五十以上のルートがある。最も古い街道はドイツアルペン街道であり一九二七年に制定され、オーストリア国境沿いのアルプスに並行し、ボデン湖からヒットラーの別荘があったバルヒテスガルテンまでの四百五十キロである。ドイツワイン街道は一九三五年に制定されているのでこれも古く、フランスのアルザス近くのシュヴァイゲンから、ボッケンハイムまでのプファルツ地方(写真3)を縦断する街道(地図、イラスト)で、三月から十月まで多くのワイ



1935年に制定されたドイツワイン街道。
プファルツ地方を縦断する
www.deutsche-weinstrasse.de



写真3(上) プファルト地方のブドウ畑
写真4(左) バートデュルクハイムの
世界一のワイン樽



ン祭りがある。この街道にあるバートデュルクハイム (Bad Duerkheim) では、百七十万リットル容量で世界一の大きさというワイン樽(写真4) の前で九月にワイン祭りが開かれる。これはミュンヘンのビール祭りのワイン版ともいえるもので、ヴルストマルクト Wurstmarkt (ソーセージ市) と呼ばれ、大きなテントの中で〇・五リットル入りのグラスでワインを飲む。五十社のワイナリーが出店し、百五十種のワインが味わえる。この祭りは昔、巡礼者にソーセージや飲み物を与えるために開かれたものであり、したがって、ワインは質や香りを楽しむというよりも、がぶ飲みである。祭りにはソーセージ屋台が大量に出店され、一般的にはソーセージとビールという組み合わせが、この時はやはりワインとなる。

日本の温泉に学んだ ドイツの温泉文化

バートデュルクハイムの Bad は温泉であり、ドイツには温泉と指定された地名に Bad とつく都市が百四十ある。著名な高級保養地バーデンバーデンを筆頭に、保養地の中央にはクアハウス(写真5)があり、これは社交場でありレストラン、コンサートホール、そしてカジノが併設されている。昼はテルメと呼ばれる温泉浴場でリラククスして喉の渴きをビールで癒やし、夜はカジノやコンサートホールでワインを嗜むというライフスタイルである。日本の温泉を調査し、温泉医療を紹介したのはベルツであるが、七〇年代の後半にドイツから日本の温泉視察団が来日し、当時若い女性の温泉ブームで日本の温泉には若者があふれていることに感動した。ドイツの温泉保養地には中高年しかいなかったのである。そして彼らはローマ時



写真5 バートデュルクハイムのクアハウス

代から続いているバーデンバーデンに、若者にも親しみやすい近代的なカラカテルメを一九八五年に新設したのである。

歴史に由来した ドイツ各地のワイン街道

ワイン街道はドイツ国内に複数あり、モーゼルワイン街道、バーデンワイン街道などドイツワインの十三生産地のほとんどに、ワイン街道と名づけられた道がある。モーゼルワイン街道はドイツで最初にローマ人がワイン造りを始めたといわれるトリアアを通り、二百五十キロ続く。ワイン文化はローマ人によってもたらされ、民族大移動の後にキリスト教とローマ文化を受け入れたカール大帝により花開いた。ワイン造りの教科書はラテン語であり、修道院の僧侶がワイン醸造の担い手となったのである。

ライン河畔に二世紀に建てられ、一八世紀にはドイツワインの最高峰である「銘醸シユタインベルガー」を造り出したエバーバツハ修道院(写真6)、シユベトレーゼ(遅摘み)やアウスレーゼ(房選び)の手法を発見したシユロスヨハニスベルク修道院など、ドイツワインを育てた伝統的な修道院は今なお、ワインを造り続けている。



写真6 エバーバッハ修道院(ライン河畔ラインガウ)

日本のワイン文化はドイツから

第二次世界大戦後にドイツワインを日本に紹介したのは、カメラのライカ社や医薬品メルク社の総代理店のシュミット商会社長の井上鍾^{かね}氏であり、その社員であった古賀守氏が独立してドイツワインの普及に努めた。日本においてドイツワインは、ライカファンや医療関係者を中心に飛躍的に普及し、七〇年代から八〇年代にかけては輸入ワインの第一位を占めた。しかしその後、フランスワインの普及や、健康に良いという赤ワインブームにより、白ワインが中心であったドイツワインのマーケットシェアは低迷している。世界

的にはドイツが生んだリースリング品種のフレッシュでフルーティーなワインの人氣が根強いが、急斜面で栽培して手摘みであるドイツワインは人手がかかるため価格が高く、日本のスーパーマーケットやコンビニエンスストアの店頭価格帯に合わず、入手しにくいのである。

全世界的に、食事とともにワインを飲む習慣が増え、辛口ワインが好まれる。ドイツワインは甘いというイメージを拭い去ることが必要なのである。そして芳醇^{ほうじゆん}なデザートワインである貴腐ワインやアイスワインレベルを食後にゆつたりと楽しむ生活習慣がまだ日本に根づいていないことも、ドイツワインの良さがアピールしきれれていない要因である。しかし、十勝ワインも六〇年代にドイツで技術を習得した成果であり、北海道や山梨が奨励しているワインツーリズムも、ドイツやフランスのワイン街道がヒントになったものであろう。

日本がドイツから もう一つ受け入れてもいいこと

日独交流の歴史で、日本が全く受け入れていないものが一つある。休暇法である。ドイツは二十四労働日以上の有給休暇を企業が従業員に保証しなければならず、しかも休暇の

連続付与(十二日)が法律で決められており、土日を入れれば二週間連続して休むことになり、休暇手当も支給される。夏休みに家族で休暇を過ごすために、学校の夏休み開始は州によって異なり、アウトバーンやキャンピング地などの混雑を緩和するように配慮されている。休暇はリフレッシュのためであり、病欠は治療のためであるから、日本のように病氣治療を休暇で消化するなど論外なのである。

ドイツで観光街道や農家滞在中心のグリーンツーリズム、国内観光が活性化しているのは、ドイツ人に休暇を取る習慣があるからこそである。また温泉文化が発達した要因は、クアプムの制度である。これは慢性疾患や持病のある四十歳以上の労働者が、温泉保養地で四週間ほど滞在して体調を整える制度であり、保険が適用され有給である。ドイツ経済が低調になった九〇年代末ころからは審査が厳しいらしいが、年次休暇とクア休暇を一度に取れば二カ月以上休みが取れる。子供の時から親と旅行に行く習慣があり、成長すれば当然のように海外旅行に行く。企業は国内や外国で見聞を広めた若者を採用する。日本の若者の旅行離れは、ドイツ人にとっては到底理解できないものではないだろうか。

(おおしま ちかこ)

三陸の観光復興

岩手県田野畑村の取り組み(2)

財団法人日本交通公社 主任研究員

大隅 一志

当財団では、東日本大震災によって甚大な被害を受けながらも他の被災地に先駆けて観光復興に取り組む岩手県田野畑村に対し、継続的な支援を行っている。前号『観光文化』(2019号)に引き続き、同村への支援を通じた観光復興への歩みを紹介する。

観光復興の目標は

「未来の価値の創造」

筆者も参画している村災害復興計画策定委員会での検討を経て、「東日本大震災田野畑村災害復興計画『復興基本計画』」が、九月下旬、村議会にて承認された(注1)。

基本計画に掲げた観光復興の目標は、『田野畑スタイルの観光・交流を通じた未来の価値の創造』である。これは、「未来に向けた復興」という村復興計画全体の方針を受けたもので、震災を糧に、これまで以上に田野畑ら

しいリズムを創出し、滞在化、観光の通年化を実現していくとともに、他産業との連携による雇用創出や流通・経済の活性化、集落再建・コミュニティ再生など、観光が生み出す価値を生かして、村全体の復興を少しでも牽引していこうという狙いからである。「未来の価値の創造」は、地域づくりの視点から見た場合、総合産業とも言える観光が果たし得る大きな役割であり、直面する三陸の被災地の復興においては、なおさら重要な視点ではないだろうか。

田野畑村の観光復興では、「未来の価値の創造」に向けて以下の五つの方針を掲げた。

「観光復興の方針」

- (1) 被災した観光施設等の復興(ホテル羅賓荘の再建、体験プログラム等)
- (2) 新たな田野畑リズムの育成と観光・交流空間の整備

- (3) 復興のプロセス等を活かした観光客の滞在と交流促進
- (4) 観光機能の再構築と情報発信力、推進体制の強化
- (5) 観光を活かした産業振興や魅力あるコミュニティづくり

現在、観光復興計画は、基本計画から実施計画の策定作業の段階へと移っている。計画の詳細については、今後の進捗を踏まえながら、都度、紹介していきたい。

新しいリズムの芽を育てる

幸いにして、今回の震災においても、北山崎や浄土ヶ浜(宮古市)、龍泉洞(岩手県)など陸中海岸を代表する観光資源の価値は損なわれずに済んだ。とはいえ、かつての三陸観光を元通りに回復させることは難しいと思われる。失われた宿泊拠点の復旧に相当の時間

を要する上、旅行者の興味や旅行スタイルが多様化するなかで、「見る」ことに重きが置かれたこれまでの周遊型の三陸観光が、次第に鮮度を失いつつあるからである。

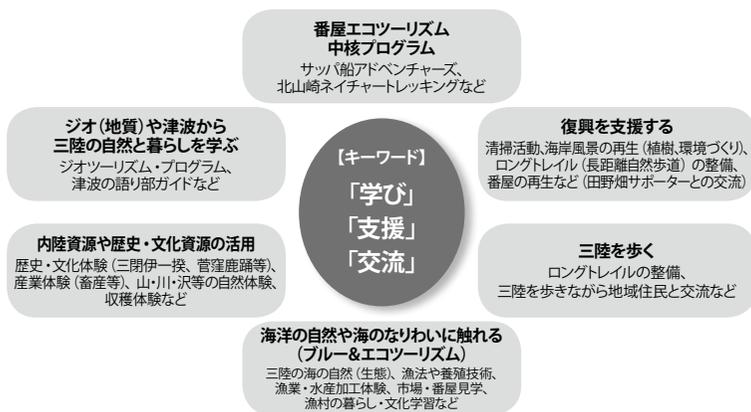
田野畑村の観光復興においても、北山崎のみに依存することなく、村がもう一つの柱として育ててきた、海の暮らしの魅力を村民が旅行者に伝えるという『番屋エコツーリズム』の理念を受け継ぎつつ、より田野畑（三陸）らしい魅力にあふれたツーリズムを再創出していかなければならない。

●キーワードは「学び」「支援」「交流」

今後の新たなツーリズムの創出には、「学び」「支援」「交流」が重要なキーワードになると考えている。それは、主に次のような理由からである。

- (1) 旅行者側に学びや社会貢献等のニーズが顕在化していること
- (2) 宿泊に質を求めず田野畑に来てくれる現実的な客層の開拓が必要であること
- (3) 震災が生み出した遺構、繰り返される津波の歴史やその体験、防災の知恵などが学ぶ資源となり、三陸観光の他地域との差別化につながる
- (4) 復旧・復興の段階では、村民との交流を通

図1 田野畑村の目指す新たなツーリズムの方向



したサポーターづくりが、観光を途切れさせず新たなマーケットを育てていくために重要であること
 こうした視点を踏まえ、当財団と村では、震災を糧としながら、将来の観光を支える新たなツーリズムの創出に向けた取り組みおよび準備を進めている(図1)。

●動き出した新たな取り組み

津波の記録の保存と「津波の語り部ガイド」

今回の大津波では、漁村集落の大半が流出し、明戸浜の防潮堤の損壊、三陸鉄道鳥越駅舎および高架橋の流失など各地に大きな傷痕を残した。村では、現在、これら津波の傷痕を記録に残し、津波を経験された方々の体験談などの聞き取り作業を進めるとともに、津波災害の歴史を後世に伝える遺構の保存も検討している。被災地を案内するツアーとしては、三陸鉄道が、被災地の復旧・復興作業の円滑な実施、現場視察のサポート等を目的として、「被災地フロントライン研修」プログラムを五月から提供している。田野畑村においても、七月下旬から「大津波・あの時あれからの語り部&ガイド」の受け入れを始めた。NPO法人体験村・たのはたネットワークのスタッフが被災集落内の災害遺構などを案内しつつ、被災体験を持つ住民が直接語り部となつて、津波当日の実体験や被災後の生活ぶりなど、生の声を旅行者に伝えている(写真1・2)。

今後、被災地の案内ツアーは、他の三陸の被災地でも提供されていくものと思われるが、災害の傷痕は、復旧が進むにつれて薄れていく。肝要なのは、被災地を案内するツアーではあつても、決して単なる「被災地巡り」にとどめず、



写真1・2 「津波語り部ガイド」。
被災体験をした住民自らが語る生の声が参加者の心に響く。

三陸でしか学ぶ(伝える)ことのできない持続的なプログラムにしていくことである。

田野畑村には、災害遺構にとどまらず、吉村昭著『三陸海岸大津波』^(注2)に数多く紹介されているように、繰り返し経験してきた大津波の記憶や記録、「津波でんでんこ」^(注3)など人々に伝承されてきた言葉や防災の知恵が残されている。また、田野畑村で見られる「高台に暮らしながら漁業を営む」という漁村スタイルは、隆起海岸である北部陸中海岸特有のものと言える。加えて、長年の地殻変動によりできた隆起海岸の海岸線に露出している白亜紀地層など、津波とも関わりの深いジオツーリズム資源も豊富であり、田野畑ならではの「学び」の要素は多い。今後も、こうした要素を活かしながら、三陸という地域の自然やそこに暮らす人たちの魅力を伝えられ

るストーリー性を持ったプログラムへと質を高めるとともに、その語り部の育成を通して、教育旅行や学びを求める大人にも通用する三陸の代表的プログラムに育てていきたい。

復興支援(ボランティア)ツアーの受け入れ

震災後、被災地のがれき処理や清掃活動、買い物など直接的な復旧活動や経済的貢献を通して、復興を支援しながら被災地を観光する旅行会社の企画ツアーが出ている。

田野畑村においても、旅行会社の企画するボランティアツアーの受け入れを行っている。

某旅行会社では、「三陸海岸復興支援&観光コース」として、世界遺産・平泉や遠野などの観光と合わせて、被災地である宮古(浄土ヶ浜)や田野畑村を組み込んだ四日間程度のツアーをこれまでに複数回催行している。田野畑村でのプログラムは、明戸浜でのごみ清掃活動のほか、大津波語り部ガイドやサツパ船体験などで、受け入れはNPO法人体験村・たのはたネットワークが行っている(写真3)。

ボランティアツアーの課題は、旅行会社・旅行者のニーズと受け入れ側とのマッチングや、受け入れ側の負担への配慮である。本来、ボランティアツアーは受け入れる被災地側のニーズに支援者が応えるものであるが、とも

すれば、支援する側からの善意の押しつけにもなりかねない。前述の旅行会社では、事前に社員が田野畑村でボランティア活動を行い、村の状況も理解した上で一般客を対象としたツアーを実施している。

今後、復旧が進むにつれて支援活動の場は減ってくる。考えられる今後の対象は、中長期的な支援活動、例えば、被災した海岸風景の再生(植樹活動など)や遊歩道整備、産業復興支援などであるが、復旧活動以上に、十分な受け入れ態勢づくりが必要になってこよう。

(おすすめ かずし)



写真3 復興支援ツアーでのボランティア活動の様子。明戸浜での清掃活動では、参加者たちが、無心に汗を流す姿が印象的であった。

(注1) <http://www.vill.tanohata.iwate.jp/userfile/hukukoukhomkeikakuonhunn.pdf>

(注2) 明治以降の三陸を襲った大津波の貴重な証言・記録を紹介した記録文学。著者・吉村昭は、毎年のように田野畑村を訪れ、村人から聞いた津波の話を記録し、村人との交流を深めた。
(注3) 「津波が来たら、肉親に構わず、各自でんでんこ(ばらばら)一人で高台へと逃げろ」という意味の、三陸沿岸地域に伝承されてきた津波防災の知恵。「命でんでんこ」といふ。



連載 I
あの町この町
第46回

友愛の行方 ——徳島県鳴門市大麻町板東

ドイツ文学者・エッセイスト

池内 紀
(イラスト)著者



JR四国の高松と徳島を結ぶ高德線板東駅。簡素な無人駅の正面は開け放して、遠くに形のいい三角の峰が見える。大麻山とい

って讃岐山脈の東端にあたり、標高はせいぜい五〇〇メートルあまりだが、スッキリした独立峰のように形がいい。昔から日本人はこのような山を神の宿るところとして崇めてきた。山上には大麻比古命ひこのみことが祀られ、南麓に四国きつての古社の一つ大麻比古神社がある。通称が「おわさはん」、春の大祭には一キロに及ぶ参道が人であふれる。

駅前からT型に古風な通りがのびている。履物店、呉服店、スーパー、理髪店、文具店……半ばシャッター街にせよ、かつて独立した町だったところの名こりを見せている。風格のある町家の一階が休み所に改造されて、「お遍路さま お気軽に お立ち寄り下さい」。角を曲がったところの雄大な石柱が「四国第

一番 霊山寺りょうぜんじ」の入口を告げている。八十八カ所札所巡りの栄えあるスタート地点であって、三々五々と白衣姿が行きかう風景を想像してきたが、まるきり見かけない。たまたまなのか、それとも霊場巡りもすっかりモータリゼーション化されて、歩き遍路は珍しい例外になったのか。

山門前で参道から離れ、三角の峰を見やりながら川沿いをすすむと、山裾の繁みの前に来た。

「板東俘虜収容所跡」

「ベートーヴェン」
「第九」日本初演の地

背のそろった木柱が二本、左右の見張り兵のように立ててある。とさり合っこの土地が財務省から「無償で借り受けた」旨の標示板。そのため正面まんに俘虜収容所と「第九」と財務省のヘンテコなトリオができた。

センドンの大木が大きく枝をひろげている。草の繁った中に杭がのぞき、「兵舎（バラク）第八棟跡」などの標示が見える。段差から赤レンガの礎石がのぞいている。そんな一角に白と黒の大理石づくりで立派な「友愛」の碑。左右に日本語とドイツ語で俘虜収容所の由来が彫りこまれている。ドイツ語が読めるせいで知ったのだが、「センドンの木」はドイツ語ではパーテルノステルbaumというらしい。教会で大きな数珠を何人もで廻し合うのを、たしかドイツ人は「パーテルノステル」という。よく似た巨大数珠を日本の寺でも見かけたことがあるから、洋の東西にそっくりの宗教的風習があったのだろう。収容所にどうしてセンドンが植えられたのか知らないが、はからずも友愛を植物で結びつけたぐあいである。

大正三年（一九一四）七月、第一次世界大戦勃発。八月四日、ドイツとイギリス開戦。八月二十三日、大日本帝国はドイツに宣戦を布告した。たてまえは一九〇二年に結んだ日英同盟によつてだが、本当の狙いはべつにあった。当時、ドイツ帝国は中国・山東半島の港湾都市青島及び南洋諸島を領しており、これを攻めて大陸進出、また南方への足がかりにしようというのである。



元板東俘虜収容所入口

九月、日本軍、山東半島に上陸。十月、日本海軍、ドイツ領南洋諸島を占領。十二月、日本軍、青島を占領。なにしろドイツにとつては、はるか遠い東方のちっぽけな拠点であつて、とても支援の手がまわらない。日清、日露を制し、日韓併合をはたして意気上がる日本軍部にとつては、赤子の手をねじるようなものではなかつたか。

青島と南洋諸島のドイツ守備隊、また召集や志願によつて防衛についたドイツ人は捕虜となり日本へ送られた。総数約五千人。急拠、千葉県習志野、福岡県久留米などに捕虜収容所がつけられた。四国では松山、丸亀などの師団地に収容。大正六年（一九一七）、徳島県板野郡板東町に収容所がつけられ、四国の各地に分散していたドイツ人捕虜が一方所に集められた。ふつう約千人といわれているが、碑文によると、正確には九五三人。眠りこけたような阿波の小さな町に、にわか異人村が誕生した。

大麻山の山裾が舌のようにのびている。収容所跡の上に池があつて、かたわらの山道をおぼつていくとドイツ兵慰霊碑の前に出た。二つあつて、旧は小さく新は大きい。新しい慰霊碑には捕虜生活中に没したドイツ人の



俘虜収容所全景（大正6年の写真による）

名前が刻んである。それでわかつたが、収容所は全国十一カ所にわたり、死者八十数人、板東では九人。大半が一九一八年、世界中で三千万人もの死者を出したスペイン風邪による。恐るべきはやり病がなければ、死者の数は格段に少なかつたのではなからうか。収容所跡地から十分ばかり歩いたところ「鳴門市ドイツ館」がある。白い二層に三

層目が黒く、黒い屋根に白い八角塔のつている。昭和四十七年（一九七二）に建設されたのが初代で、平成五年（一九九三）に新しく建て替えられた。国際交流の建物としては全国でも一、二を争う立派さではあるまいか。受付の女性にその旨を伝えると、「キョウウティがあるから」と言われた。

「ドイツと協定したのですか？」

協定ではなくて競艇きやうてい。鳴門競艇は四国随一であつて、少なからず市の財政を潤し、ひいては「第九」のふるさとに寄与しているらしい。

ドイツ館の二階が展示室で、開設から閉鎖までの四年間にわたる収容所のようすが、資料、映像、人形などで再現してある。「バラック」と呼ばれた八棟は、ごくお粗末な家屋をいう日本語の「バラック」とはちがいが木造の大きなもので、一人あたりのスペースは小さかつたにせよ、共有部分をサロンにしたり、孤独好きが読書したり、音楽好きがヴァイオリンを奏いたりできた。展示資料の一つに『鉄条網の中の四年半』というオリジナル画文集があつた。詩人肌とアマチュア画家の合作で、文と絵で収容所暮らしをつづつており、表紙には軍帽の男が悠然とパイプをくゆらせている。テニス、サッカー、鉄棒、ダンス、農作業、乳牛指南、洋酒造り……。



画文集『俘虜収容所の4年半』表紙(コラージュ)

一応は鉄条網で区切られていたが、「ドイツ村」はさまざまな形で外に開かれていた。

「俘虜独逸人。後備陸軍上等兵 農学士
ハインリヒ・シュミット 当年四十歳

右の者は洋種野菜栽培の専門家でありー」

当板東町農会のもためによって、ドイツ式栽培法の実習指導に向いた報告書。経済学博士、准士官ヘルリナーが郡役所、また徳島市商工会議所で「大戦と世界経済の展望」と題して講演。ヨーゼフ・ウェーバ、フリッツ・ローデル両名より「ウイスキー」「ブランデー」の製法に関して指導を仰ぐ旨の出願。プラン・タランほか二名が県立農学校の依頼を受けて養豚場に出張し、学生の前で、「分校飼育ノ幼豚三頭ノ去勢」をしたこと、また「他ノ豚一頭を屠殺シ、コレヲ解体ノ上、調理シテ、校長生徒全員ニ試食セシメタ」こと。どのような料理だったのかはわからないが、「一同、ソノ妙技ニ舌ヲ巻キ多大ノ感銘ヲナシタリ」とあるから、舌つづみを打ってバクついたと思われる。

ほかにも牧場の設計、指導、ドイツ式体操のコーチ、陸軍少尉にして音楽家ポール・エンゲルによる洋楽教授。

収容所開設二年目の春、板東町の郡公会

堂で「俘虜製作品展覧会」が開かれた。会期は十日間。人出を見こして地元の阿波電気軌道は公会堂に近い駅まで徳島発の臨時を運転。そのときのポスターが展示されているが、淡路島からの客もあてこんで汽船・軌道連絡切符を発行、往復二割引。

即売品の目録によると、絵（水彩、木炭、パステル、鉛筆、油彩）二百点、豪華客船や軍艦の模型、銅製の函や像、シャンデリア、額縁、鏡台、椅子、シガレットケース、縫いぐるみ、絵葉書、灰皿、毛糸靴下、蝶や昆虫の標本、蜜蜂飼育箱、ハム、ベーコン、ヨーグルト、自動計算器、洗濯機械、冷蔵機械、セロ、チッター、（修理済み）ヴァイオリン……。いずれもドイツ人捕虜の手づくりによる。

公会堂が第一会場で、札所一番霊山寺の境内が第二会場になった。こちらではポール・エンゲル管弦楽団による演奏、ドイツ体育競技、「ドイツ相撲」、ドイツ笑劇、鉄棒、平行棒などの器械体操、人間ピラミッドなどが披露された。連日押すな押すなの盛況で、ピヤホールも大繁昌。収容所から会場まで約二キロあり、ドイツ人捕虜は連日、販売、出演に出向いた。もし逃亡を図るならわけなくできたはずだが、ただの一人もそんなことはしなかった。

町の人々とさまざまな交流ができたのは、もともとドイツ人捕虜の多くが職業軍人ではなく、開戦とともに召集されたり志願してきた民間人であったせいだろう。高等教育にたずさわっていた知識人もいれば、腕に覚えの職人もいた。東京の商社支配人として日本語に堪能なドイツ人は通訳のかたわら、日本語辞典をつくり、日本語通をふやしていった。

この事情は総計五千人のドイツ人捕虜に共通したところだった。「製作品展覧会」が催された大正七年当時、俘虜収容所は全国に八カ所あったが、板東のほかのどこにも、この種の交流がなされた記録はない。また板東に集められる前の松山や丸亀では捕虜の外出は月一度、それも厳重な監視つきと定まっていた。俘虜情報局の管理のもとに、同じ方式が各地で続けられたにちがいない。

板東はあきらかに異例であって、所長・陸軍歩兵大佐・松江豊寿のイニシアティブによるものと思われる。展示室の入口正面のところには肖像が掲げているが、明治の軍人におなじみの髭をはやしたいかめしい容貌ながら、目元にゆたかな温顔をとどめている。その経歴の初めに一つの特徴がある。明治五年（一八七二）生まれたが、父は元会津藩士と知れば、すぐにわかる。明治維新に際し、

会津は幕府軍と戦って敗れ、二十八万石の大藩は取りつぶし、おめぐみの下北半島三万石を指示され、藩士は荒涼とした北方に移った。そんな家に生を受け、薩長閥がハバをきかせる軍部にあつて、しかるべき地位を得た。知勇を兼ねたその人となりの力だろう。さらに松江大佐は父を通して「敗者」の立場と悲憤をよく知っていた。捕虜であれ、尊ぶべき人間性にかわりはない。帰還したドイツ人が「マツエ大佐」を語るとき、こぞって「本当のカヴァリエ（騎士）」だと述べた。ドイツ語における最高の称讃にあたる。第二次世界大戦にも召集を受け、ソ連の捕虜になった一人が、のちに問われて答えている。

「私は、確信をもっていえます。世界のどこにバンドウのようなラーゲル（収容所）が存在したでしょうか。世界のどこにマツエ大佐のようなラーゲル・コマンダー（収容所長）がいたでしょうか」

電流を通した有刺鉄線と機関銃つきの見張り台。つねに死を伴う苛烈な罰則、最低の食と非人間的な強制労働――。第一次大戦以降の捕虜収容所に通常のことだが、板東には一切なかった。世界の戦史にあつて、およそ稀有な例外だった。

一階に下りてくると、フロアに人だかりがしている。全員黒服で男ばかり。書類をひろげ、指示したり、チェックしたり。よく見ると中心の三人はドイツ人で、その一人は精悍な坊主あたま、ひときわ目つきが鋭い。受付の女性によると、日独交流一五〇周年にあたり、ドイツ大統領が来日する。十日ばかりのスケジュールに鳴門市ドイツ館訪問が入っていて、ドイツ警察先発チームと徳島県警の合同打ち合わせ兼下見だという。ものものしい一団が階段、通路、トイレ、事務室をチェックしながらまわっていく。

鳴門市はかつて製塩で栄えた。ドイツ北部の町リューネブルクは岩塩の産地として知られている。塩が縁で姉妹都市を結び、ドイツ館の奥まったところがリューネブルクのあたるニーダーザクセン州の広報コーナーにあてられている。そこでコーヒーが飲めるといっているので、旧バイエルン王室御用達アロイス・ダルマイヤーのプレミアムコーヒーをいただきたいと、下見集団からこぼれ出た若いドイツ人が所在なげにやってきた。デユッセルドルフの新聞記者で、大統領専属とのこと。コーヒーをすすめると、残念そうに腕時計を指さした。時間がないというこらししい。ドイツ語で「いかなるツェレモニー（儀式）も

退屈である」と言うと、わが意を得たようにならずいた。事務室から出てきた黒服軍団がゾロゾロと二階へ上がっていく。若い記者はあわててあとを追いかけた。

国際交流の歴史にはいろいろな記録が残されているが、板東俘虜収容所をめぐるものは、もつとも特異で、もつとも人間性にあふれ、とりわけ興味深いケースだろう。大正八年（一九一九）、徳島市内新富座でポール・エンゲル管弦楽団が催したコンサートにおいてベートヴェンの「第九交響曲」が演奏され、わが国「第九」の始まりとしてライトがあげられがちだが、それはむしろお別れのエピソードである。そこにいたるまでの年月の動静と人の動きこそ、くわしくたどり直す意味がある。真の国際交流のための数々のヒントが見つかる気がする。メルヒェンのような遠い昔ばなしとするには、あまりに惜しい歴史のひとつまなのだ。

板東町は昭和三十四年（一九五九）、隣り町と合併して大麻町となり、「板東」の名が消えた。昭和四十二年（一九六七）、大麻町は鳴門市に編入された。「鳴門市観光ガイドマップ」をひらくとひと目でわかるが、観光コースは市の東北部、旧鳴門市の海寄り、島寄り、うずしお巡りに集中している。旧板

東町は市の西南端にひっそりと孤立している。霊場一番霊山寺は大麻比古神社の参道入口にある。これと平行して板東谷川が流れ、その川沿いにドイツ館、収容所跡、また阿波が生んだキリスト教実践家・賀川豊彦記念館がある。霊場二番極楽寺もすぐ近い。仏と神とキリスト教、さらに歴史の置き土産があつらえたように揃っている。

これだけの観光的財産が申し分のない配置にあるのに、それぞれがポツリポツリとあるだけで、エリアとして生かされていないのはどうしてだろうか？ ドイツ館も賀川豊彦記念館も建物は立派だが、人のけはいに乏しく、土地と人にほとんどかわりがないかのようだ。たまに交流会があつても、予算つきの催しはその日かぎりのイベントにとどまるのだ。せめて遊歩道と標識を整備して、エリアを一巡できるコースを用意してはどうだろう。札所巡りの人が何げなくドイツ館に立ち寄り、奇蹟のような収容所があったことを知ることは、こよなく遍路の心にかなうのではなからうか。

（いけうち おさむ）

〔注記〕 棟田博「板東俘虜収容所物語」、及び林啓介氏の教示を受けた



連載Ⅱ
ホスピタリティーの
手触り67

リバイバルという発想

旅行作家

山口 由美

忘れられかけたものの中に

思いがけない宝物が…

香港を拠点とし、二〇〇七年には東京にも開業したザ・ペニンシユラ。歴史ある名門ホテルとして知られるが、日本人にその名が広く知られるようになったきっかけが、アフタヌーンティーではなかったかと思う。

天井の高い重厚なロビーラウンジ、優雅なクラシックの生演奏を聴きながら、テーブルに運ばれる三段重ねのトレーに美しく盛りられたスイーツ。バブル経済とともに日本人の海外渡航が二千万人を超えたころ、とりわけ多くの日本人が、香港でペニンシユラのアフタヌーンティーに出かけたのだった。

ザ・ペニンシユラのアフタヌーンティーは今も多くのお客様を楽しませている。香港は

かりでなく、東京を含む世界各地のチェーンホテルのロビーで、毎日、昼下がりになると催される優雅なイベント。白い帽子のページボーイやチョコプレートなどと並ぶ、ザ・ペニンシユラというブランドを象徴する重要なアイコンと言っている。

そのアフタヌーンティーが、実は、創業時からずっと受け継がれたものではなく、一九八〇年代初め、当時のヘインツ・リッツマンという料飲支配人の発案によるリバイバルであったことは意外に知られていない。

映画『慕情』で知られるレパルスベイ。かつてここにペニンシユラ創業より歴史のある系列ホテル、レパルスベイホテルがあった。一九二〇～三〇年代、ここで行われていたのが「ティーダンス」だった。

午後のお茶を楽しみながら、音楽とダンス

を楽しむ、古き良き時代の優雅な雰囲気を実現することはできないだろうか。料飲支配人のリッツマンは考えた。こうして考案されたのが、音楽の生演奏とともにサービスするアフタヌーンティーだったのである。

ザ・ペニンシユラの開業は一九二八年だが、親会社の香港上海ホテルズは、それ以前にも香港、上海でホテルを経営しており、その歴史は優に百年を超える。だが、現在のようなインターナショナルホテルとしての地位を確立するのは、一九九四年のタワー完成と、時を同じくして進められた世界進出においてではなかったかと思う。

飛躍の前にした、いわば胎動の時期が八〇年代だったことになる。香港では経済発展を謳歌する一方で、一九九七年に迫った返還に対する不安も人々の心に影を落としていた。



1931年9月に来日したタイ国王夫妻を迎えた富士屋ホテルのメインダイニングに飾られた身の丈以上もある富士山の盆景 (山口由美著「ホテルクラシック」商店建築社 掲載写真から)

アフタヌーンティーとは、そんな時代に発案された空前のヒット商品にして、ホテルのアイデンティティーを確立させたものだったのではないか。その後、シンガポールなどでもアフタヌーンティーのブームが起きるが、その発端も、あるいは香港のザ・ペニンシユラだったのかもしれない。

リバイバルという発想は、フアッションなどでは当たり前のようにある。少し前は一九七〇年代の、最近は一九八〇年代のクラシカルなフアッションがもてはやされている。時の流れとは不思議なもので、いったんは時代遅れになっても、ひと世代くらい時代が巡ると、再び新鮮なものとして市場に受け入れられるようになる。

拙著『百年の品格 クラシックホテルの歩き方』の出版にあたり、日本のクラシックホテルを改めて取材し、その経営者の方々とお目にかかる機会も多かったのだが、その時に思い出したのが、このアフタヌーンティーの逸話だった。歴史あるホテルの財産とは、綿々と受け継がれた建物やサービスだけではなく、積み重ねた時間の中で、忘れられた、あるいは忘れられかけたものの中に、思いがけない宝物がある。

日本のホテルにおいて、そのひとつと思うのが「盆景」である。日本古来の芸術である盆栽を使って箱庭のような世界を食卓上に再現する。一九六〇年代ころまでは、日本ならではのおもてなしとして、各地のホテルで造られていた。自前の温室を持ち、庭師を抱えていたことから、ことさらに「盆景」をお

家芸としたのが箱根の富士屋ホテルである。古いアルバムをひもとくと、驚くほど大掛かりな「盆景」をいくつも見ることができ

る。一九三二年、国賓として来日したタイ国王を迎えたのは、なんと身の丈以上もある巨大な富士山であった。しかし、現在は、「盆景」を造ることのできる職人が、辛うじて一人だけ残っている状況だという。

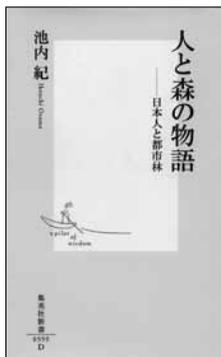
婚礼などでたまにリクエストがあるそうだが、日本ならではの伝統あるホスピタリティーの形として、もっと盛大にリバイバルすればいいのと思う。

富士屋ホテルでは、長らく卓上に鉢植えの植物を置く伝統があった。これも自前の温室で育てたもので、ヨーロッパ由来のスタイルである。しかし、卓上に土の付いたものがあるのは不潔ということで、近年、廃止されてしまった。「盆景」が廃れたのも、同じ理由だったのだろうか。

震災後、ことさらに日本人としての誇りやアイデンティティーが問い直されている。日本人が培ってきたホスピタリティーの伝統やアイデアを、いま一度、棚卸しするのにいい機会ではないかと思う。

(やまぐち ゆみ)

新着図書紹介



新書判 216ページ
定価 740円
集英社新書

フランスのブローニュ（パリ）やオーストリアのウィーンの森など、世界的な都市は、すぐそばに大きな都市林を備えている。

日本でも地域の人々の苦心と努力によって「緑」を実現し、「人と自然の共生」のプロセスを通じて「生物多様性」を示す独自のケースがあるはずだと、著者は全国への「聖地巡礼」を繰り返してきた。

北海道大学の「苫小牧地方演習林」が都市林として生まれ変わった背景には、乏しい予算を何倍にも活かすための自然と風土に対する深い知識と愛情が存在する。その考え方を広げていくと、「都市林」という言い方はしなくても、日本では古くから、その土地の人々が必要とする独自の森づくりを続けてきたのではないかとというのが、著者の仮説だ。

山形県庄内地方の「クロマツの森」、和歌山県田辺市の「クマグスの森」、沖縄県北部の「やんばるの森」など、著者が「聖地巡礼」を通じて訪れた各地の森が本書『人と森の物語——日本人と都市林』（池内紀著、集英社新書）で紹介されている。十四章分を書いた時に東日本大震災が発生し、大津波で跡形もなく消え失せた陸前高田の街並み

と松原を目に焼きつけて書いたのが岩手県気仙地方の「匠の森」だった。

陸前高田市の広田湾に臨んで生まれた東北地方には珍しい白砂青松の「高田松原」は、根こそぎ大津波にさらわれた。わずかに一本だけが奇跡的に生き残り、希望を託す象徴としてニュースを賑わしたのは記憶に新しい。

町は失われたが、気仙地方の大工をはじめ、釜石の鉄工業、石巻の水産業、陸中の各地に残る音頭や踊り、造形、芸能など、伝統の技術を持つ多くの人々は健在だ。地域の人々を活かした人間教育の場をつくり、その「匠の森」を大震災後の東北復興プランの中に位置づけてはどうかと著者は呼びかけている。

クラシックホテルといえば、一般的には、長い歴史を持ちながらも、現役の宿泊施設として、オールドファンやリピーターだけでなく若い世代からも、時に畏怖や尊敬の念を持って熱いまなざしを注がれているイメージが浮かぶ。

日本にも、明治時代に創業され、今なお多くの人々に愛され続けているホテルがあり、著者は『百年の品格 クラシックホテルの歩き方』（山口由美著、新潮社）で、その百年以上の年月を重ねたホテルを「クラシックホテルの中のクラシックホテル」として「百年ホテル」と名づけた。

箱根、日光、軽井沢、奈良という日本を代表する観光地に存在する「百年ホテル」は、明治、大正、昭和から平成に至るまで、目まぐるしい変化

を遂げた時代を生き抜き、二二世紀に入った今もなお、それぞれの地でメルクマールとしての揺るぎない地位を維持している。

著者が指摘するように、日本人による日本のホテルとして、日本の「おもてなし」を最初に海外に発信したのは「百年ホテル」だった。

その一つである富士屋ホテルの三代目を祖父に持つ著者が、「見る」「味わう」「泊まる」などの観点から、箱根だけでなく、日光、軽井沢、奈良の「百年ホテル」の楽しみ方を、それこそ噛み砕くように丁寧な筆致で描く。

クラシックホテルを支えてきた幾多の人々と祖父の姿とを重ね合わせ、著者は「華やかな舞台を裏で支えるのは、実のところ、地道な毎日の積み重ね」と指摘する。クラシックホテルは、その小さな積み重ねが「伝統」というものの「正体」であることを知る人たちによって育まれてきたものなのだ。

『百年ホテル』初心者へもかゆい所に手が届くまでの配慮を見せながら、自身も「伝統」というものの「正体」を知る著者ならではの説得力が随所にあふれている。

（挑全）



A5判 127ページ
定価 1,500円
新潮社



観光文化 第210号

第35巻6号通巻第210号

発行日：2011年11月20日



発行所：財団法人 日本交通公社
東京都千代田区丸の内 1-8-2
第一鉄鋼ビル
〒100-0005 ☎03-5208-4701
<http://www.jtb.or.jp>

編集室：東京都千代田区丸の内 1-8-2
第一鉄鋼ビル 観光文化事業部内
〒100-0005 ☎03-5208-4729
<http://www.jtb.or.jp/publishing/>

編集人：片桐美徳
発行人：志賀典人



印刷所：JTB印刷株式会社

禁無断転載

ISSN 0385-5554